

令和5年度第2回秋田県立美術館運営協議会(書面開催)要旨

1 書面開催について

書面開催の方法は、報告・協議事項について、協議会委員から意見を徴収して集約したものに、秋田県立美術館指定管理者(公益財団法人平野政吉美術財団)の回答及び考えを付して会議録とする。

2 書面提出委員(50音順、敬称略)

加藤 隆子 齋藤 るみ子 長瀬 達也 藤田 亜樹子 山崎 宗雄

3 報告・協議事項及び意見を求める項目

(1) 報告事項

- ① 令和5年度 事業概要について
- ② 令和5年度 月別入館者数
- ③ 令和5年度 展覧会別入場者数
- ④ 令和5年度 県民ギャラリー入場者数
- ⑤ 令和5年度 セカンドスクールの利用者数
- ⑥ 令和5年度 ミュージアム活性化事業(特別展)外部評価集計表
- ⑦ 令和5年度 ミュージアム活性化事業(特別展)来場者アンケート集計表
- ⑧ 令和5年度 ミュージアム活性化事業(特別展)分析

(2) 協議事項及び意見を求める項目

- ① 令和5年度 秋田県立美術館の事業について
 - ・ 展覧会事業(特別展4本)について
 - ・ 展覧会事業(企画展1本)について
 - ・ 教育普及事業(セカンドスクール、各種教室等)について
- ② 県民ギャラリーの利用状況(利用者数、利用促進のための御提案など)について
- ③ その他

4 委員からの御意見・御提言等並びに秋田県立美術館指定管理者の回答

① 令和5年度秋田県立美術館の事業について	
(1) 展覧会事業(特別展「乙女デザイン」「北斎漫画」「旅する画家」「ナショナル ジオグラフィック」)について	
委員からの御意見・御提言等	指定管理者の回答
○コロナが落ち着いたこともあってか、特別展4本中3本が入場者数1万人を達成したということで、全体的に好調であったと思う。欲を言えば2万人以上の爆発的な展示も欲しかった。入場者数1万人以上の展示では、50代までが4分の3以上を占めているという集計結果から、今後の入場者数増には、この世代を取り込む内容が求められると感じる。	●5月に新型コロナウイルスが第5類に移行されてから、美術館周辺でもイベントが増え、にぎわいを取り戻しつつある。今後も県民ニーズを的確にとらえ、来館者の満足度を高められるような事業を展開してまいりたい。
○今年度の特別展は内容が多様で、意欲的な取り組みが多かったと評価する。県民や来館者に、美術の裾野の広がりや深さを提供できた。秋田県の文化や風土との接点を重視していたのも良かった。	●県民の美術に対する興味・関心を一層高められるよう、皆様からの御意見やアンケート結果等を生かし、様々な事業を企画してまいりたい。
○今年度も「北斎漫画」や「ナショナルジオグラフィック」など、大型で多くの県民の知的好奇心に訴える特別展が開催できたことは喜ばしいことである。アンケート集計を見ると若い女性の入場者が多く、これも喜ばしいことであると思う。	

○「乙女デザイン」のアンケート結果では、30代の入場者が多かった。挿絵・ポスターといった身近な大衆芸術と、乙女チックな打ち出し方が功を奏したと思われる。秋田の作家顕彰や他施設との連携といった分野での取り組みを評価する。	●美術愛好家はもちろんのこと、大正文化に関心のある方や文学愛好家など、多様な層にアプローチするため、作品選定や広報、関連イベントに工夫を凝らした。特に、図書館や文学資料館と連携したことにより、文学愛好家が美術館に、美術愛好家が図書館に足を運ぶといった流れが生まれた。今後も、他施設や周辺商店街等との連携・協力を進めたい。
○「北斎漫画」は、これまでも何度か公開の機会があったが、いつ展示しても人気が高い。時代や世代を超えて人々に愛され続ける北斎作品の魅力と力量を改めて認識させられる展示であった。	●作品所蔵者から多大な御協力をいただき、前後期に分けて多くの作品を紹介することができた。幅広い年代に対応した親しみやすい解説パネルが好評であった。また、秋田を題材にした作品に対する来場者の関心が高く、こうした作品を前後期を通して展示できたことも満足度が高まった一因と考える。
○一番興味深かった展示は「北斎漫画」である。開催時期が夏休み中だったことも入場者が多かった理由だと思う。	●斎藤真一は平成28年に展覧会を開催しているが、それ以来、もう一度取り上げて欲しいという声が継続して寄せられていた。こうしたアンケート結果を踏まえて、今回は藤田嗣治と斎藤真一というふたりの画家に共通する「旅」というテーマに着目して紹介した。美術館の基本方針の一つである藤田嗣治作品の調査研究と展示公開には、今後も鋭意取り組んでまいりたい。
○「旅する画家」は、乳白色と赫、作家の個性が静かにぶつかり合いながらも協調し合う展示であった。二人の作家の個性を“旅”という観点から引き出した点が良かったと思う。今年度の展示の中では学芸の調査研究の成果を一番感じた内容であった。引き続き、藤田嗣治作品の調査研究と展示公開に対する意欲的な取り組みを期待する。	●冬期間の展覧会における来場者の伸び悩みが課題であったため、「写真」という身近で親しみやすいもの、その中でも世界的に知名度の高い学術誌「ナショナル ジオグラフィック」に掲載された代表作を取り上げた。大型作品が多かったため、迫力ある作品をゆったり鑑賞していただけるよう意識して展示を構成した。結果として、写真愛好家や美術愛好家にとどまらず、御家族連れや外国人など、幅広い層の来場者に恵まれた。今後も幅広く情報を収集・分析して企画力を高められるよう努めたい。
○「ナショナルジオグラフィック」は、自然、科学、時事にフィットした写真展であった事もあり、他の展覧会と比較して男性の来場者が多く、また市内を含む県内の入場者が多かった。県民ギャラリーも使用しての展示であったため、見ごたえがあったと思う。近年の美術館では従来の絵画や彫刻といったクラシカルな展示内容に限らず、他分野、また範囲も広がっていることから、今後も県民ニーズに対応できる意欲的な展示を望む。 ○「ナショナルジオグラフィック」の展示が印象的だった。作品数が多かったためできた事だが、美術館の空間全体を上手に使っていた。大きな作品が魅力であった。空間を仕切らない使い方も良かった。	

(2) 展覧会事業(企画展「平野政吉コレクション 空を見つめる」)について(開催:R6.1.27~)

○平野政吉美術財団の収蔵品を活用する企画展を今後も継続してほしい。なおポスターに使用している作品は旧美術館時代からのお気に入りの作品である。学芸員の方々の研究成果などをもっと提示してほしい。

●平野政吉コレクションの調査研究とその公開は、美術館の基幹となる活動であるため、今後も研究を重ね、定期的に様々な成果を県民に公開してまいりたい。

○地味ではあるが、平野政吉コレクションの厚さを知らしめる好企画である。“お雇い外国人”アントニオ・フォンタネージが画学生たちに説いたという「名もなき風景を見つめる」という言葉が心に残った。

●コレクションには、素朴ながら力強い作品が多い。多角的な視点から鑑賞していただけるよう、今後も尽力してまいりたい。

(3) 教育普及事業(セカンドスクール、各種教室等)について

○教育普及事業は、現代における美術館の責務である。各種教室等を継続している姿勢は高く評価したい。内容については、初心者向けで、「美術作品の見方や楽しみ方」を重視する取り組みがあってもよいのではないと思う。セカンドスクールの利用は、利用者数を増やす方策が必要ではないか。特別支援学校などが、他の来館者を気にせずに来訪できる方策が開発されるとよい。

●セカンドスクールの利用は、未来を担う子どもたちの豊かな感性を育む重要な活動であると考えている。各種学校の先生方とコミュニケーションを取りながら、ニーズに沿った内容を取り入れるとともに、活動内容の広報にも力を入れてまいりたい。

○セカンドスクールの利用に関し、1月末現在の利用者数実績では昨年より減少傾向にあるようで残念である。少子化・学校統合などによるものなのか、教育現場のニーズを探りながら今後の対応を期待する。各種教室、イベント実施等に関しては、限られたスタッフで、様々な工夫をしながら取り組んでいると思う。その姿勢と努力は評価したい。

○アクセスしやすい秋田市内だけでなく、郡部の小・中・高生に来館してもらう企画があれば良い。

○大壁画の出前授業のアピールを引き続きお願いしたい。「眠れる女」のレプリカなども誕生すれば出前授業の幅も広がるのではないか。

○手話による作品解説は良かった。障害種別に合わせた企画をしていけると良い。

●障害の有無に関わらず文化芸術に親しむ機会を持っていただけるよう、今後も取組の充実に努めたい。

○高階秀爾顧問による特別講座「名画を読み解く」は、美術館の外での開催だったが、多くの方々が聴講し、教育普及に貢献していると思う。令和6年度は、千秋美術館もリニューアルオープンすることから、秋田市の芸術文化ゾーンの核として県立美術館の存在感をさらに大きくしていただきたい。

●美術顧問である高階氏による特別講座のような専門性の高い教育普及事業にも引き続き取り組んでまいりたい。今後も、芸術文化ゾーンの中核施設として、役割を果たしていきたいと考えている。

② 県民ギャラリーの利用状況(利用者数、利用促進のための御提案など)について	
○エリアなかいちを訪れた際、気軽にふらりと立ち寄れるギャラリーとして、とてもありがたい存在であると思う。「秋田美術作家協会展」も、伊藤康夫氏(新制作)、斎藤昇氏(自由美術)、澁谷重弘氏(無所属)といった重鎮の作品が並んでいたかと思えば、永沢碧衣氏や大須賀勉氏といった新進気鋭の作家が向かい合っているなど見応えのある展覧会であった。 ○利用者等の情報を添えて関係機関への発信を。県の補助などが可能となれば利用者が増えるかもしれない。予算がつけられないものか。 ○県民ギャラリーは、毎年作品展を行っている団体が固定化されているように思われる。利用が少ない時期に、個人、市民、県民団体などに周知することが必要ではないか。 ○美術館主催以外の自主的な使用状況としては少し寂しい状況であると感じる。人口減少、美術団体数の減少と高齢化などの影響もあると思うが、近隣に文化創造館が設置されたことも大きいと思われる。今後の方策としては、互いの設置目的と役割分担を認識し合うことが必要であると考え。また、展示企画以前の「秋田県の文化芸術の発信」に関わる部分でもあることから、今後の利用促進への取り組みの検討を求める。 ○もっと利用者が増えて欲しい。理想としては、一年中何らかの利用があるとよい。利用者の展示期間が現在より長くできればと考える。	●県民ギャラリー利用者は基本的に団体で、かつ固定化されているのが現状である。個人や小規模団体では展示面積が広すぎることや、使用料の負担が大きいことなどから、なかなか利用者増に結びついていない。各種学校や団体に広報を続けながら、利用しやすい環境整備に努めてまいりたい。
③ その他	
○来館者が特別展や企画展で感動したことや興味をもったことなどを SNS などで「拡散」したくなる取り組みが必要ではないか。テレビ局や新聞社との連携は、さらに強めてほしい。 ○「北斎漫画」では入口通路、「ナショナルジオグラフィック」では展示の企画として、それぞれ写真撮影ができるスペースがあり、SNS などで拡散されていた。藤田作品が撮影不可なのは理解しているが、それ以外の特別展では、SNS 時代を意識した工夫も必要であると思われる。 ○今年度はギャラリートークに一度も参加できなかったが、折角なので多くの方々に参加してほしい。 ○運営協議委員の選抜には名のある方ばかりでなく、自分のような一般市民や特別支援教育者など、幅広い視点を持った人選を今後も行ってほしい。	●SNS等による「ロコミ」の強さは実感している。これまでの取組の成果と課題を分析し、今後も効果的な広報活動を展開してまいりたい。 ●運営目線では気づけない点等にも御意見をいただいている協議委員の皆様には大変感謝している。今後も様々な視点から御助言をいただきたいと考えている。

○文化創造館と同様に近隣にミルハスが開館したことは、今後の連携取り組みの幅を広げるものと感じている。特に海外からのオーケストラ来秋の際などは世界的に名を知られている“フジタ”の作品を展示していることなどから、団員や来場者に対しての積極的なPRが効果的ではないかと思う。コンサート当日は県外からの宿泊者も多いことから、ホテル等との連携も入場者増につながるものとする。

●他施設や関連団体との連携は今後ますます重要なものになっていくと考えている。今後も、他施設や関連団体と連携・協力しながら地域のにぎわい創出に努めたい。

5 総括

様々な情勢が目まぐるしく変化する昨今であるが、皆様のご意見を謙虚に受け止めながら、全ての人に開かれた美術館を目指してまいりたい。今後も、県民の多様なニーズに応えられるよう、幅広い層に対応した多様な事業を通して、地域の活力向上に寄与したいと考えている。